

大和高原の巨石（磐座） 伝承

(続 六)

会員 植村勝彌

笠置山といえは全国的に知られている歴史上の大事件であった元弘の変の舞台となった山である。このことは中世の項で大和高原との関わりとしてとりあげることにする。笠置山（二八八米）は行政的には京都府相楽郡笠置町であるが、大和高原の東北の位置にあって大和高原の大きな川の内二つが笠置山の麓に流れ木津川に合流する。一つは布目川で延喜式内社都祁山口神社あたりと福住高峰山等を源流にした大和高原で一番大きな川である。もう一つは春日山の東、芳山を源流とする川と前回取り上げた塔の森（六六〇米）を源流とする川が合流、白砂川として笠置山西麓で木津川と合流する。笠置山の北側が木津川であるが奈良県の宇陀地方から三重県伊賀地方の水を集めて流れる大河である。そこに合流する布目川、白砂川は大和高原の七〇%余の水を集める。古代から生活の関わり、行政的関係は深く、縄文人の伝播、交流もこれらの川の役割は大きく重要だった。縄文草創期の遺跡はこの川

を遡る形で発見されている。近世では津藩領や柳生藩領などと同じ行政下にあった。さて、笠置山だが山全体が奇岩、巨岩からなっていて、柳生とは隣りあわせで柳生にも同じ岩石、巨石が多くある。

山の名前の由来は、天智天皇皇子が狩にこの山に馬で来られ鹿を追っていたところ、岩の上に登ってしまつて非常に危ない状態に陥られた。そこで皇子は山の神に助けを求め祈られたら無事降りることが出来た。それが出来た。皇子はこの岩山に弥勒仏を彫る事を誓いその目印に自分の笠を置いたのでもっともらしく伝えられている。



は形状によるのが一番多い。近くの縄文遺跡は加茂などで、水を司る位置と巨石の聖山で古代から神体山として春日山、三輪山と同じく磐座祭祀が行われ太陽神（雷（雷神）、安全の神（不老長寿）、中国道教の様な）、水運の神（木津川を利用した交流）と川魚（魚は重要な食料）の存在である。弥生時代の有樋石剣が発見され



後日皇子は約束どおり彫ろうとしたが岩石は高く危険でこずつていと、天人が降りてきて成し遂げてくれたとある。鎌倉時代はじめ弥勒信仰の山、笠置寺となるに至って笠置寺縁起が作られたものによるのであるが、地名と言うのは

ている。おそらく祭祀用に使ったのであろう。弥生時代の人達は農耕の豊かな収穫のために順調な四季の移り変わり、太陽の恵み、適当な雨、強風や災害の無いように祈ったものと思われる。更に右に記した日本の古代からの生命感に中国から伝わった不老長寿や蓬莱思想、星信仰が重なった信仰あっても不自然に思わない山である。また龍神（水神）を祀ったのは農耕よりも川の集まるところから雨乞い雨止めの必要が重きをなしたと思われる。この神が六世紀初めには高麗神や罔象女命などの神名を祀る社となるのだが龍神信仰と習合して吸収されたのである。笠置山に古墳を造った人物は水運、山村祭祀を司る集団の首だったのだろうがこの地を支配した豪族の名は知る事は出来ない。その古墳は「こけこの森」と呼ばれている。元日の朝に金の鶏が出現するといふ。笠置山の尾根続きが柳生の里で、後期古墳が造られている。大和高原には、いくつかの金鶏伝承があり、内容はたりよったりで

ある。これは、地域集団が先祖や諸々の霊を鎮める行事を催した場所、ずいぶん時代は近くなるが鎌倉時代中、後期になると大和高原に大きな五輪塔が（160〜200m）造られる。地域（集落）の埋葬墓地の入り口あたり、また中央一段上に建っている。この石造物に儀礼の内容を仏教と習合したのち阿弥陀信仰の広まりと共に結縁衆らによって受け継がれたようである。

役の行者（小角）らの修験者にとつては恰好の聖山であった。具体的には記録に残っていないが、のち密教修験者が受け継いだ。平安時代末〜鎌倉時代初期解脱上人（のち詳しく記す）によつてこの聖山は弥勒信仰のメッカ。笠置寺を中興された事によつて過去が過ぎ消されたのではないかと思つている。

奈良に都（平城京）が造られ天平文化、仏教文化が盛んになると都の建物と共に大寺が建立されていく。つまり奈良の都は用材、消費物資の大消費地で、その供給に

関わる笠置地方（大和高原を含む地方）は水運の重要通路として大きな役割を果たすこととなる。特に笠置山は、北側に笠置川（木津川）東麓に布目川、西麓は白砂川を見下ろす位置にあるので、こんな話も伝わっている。用材を東大寺へ運ぶについて伊賀国から木津川の岩が妨げになったので良弁（七七三の人。渡来人の子孫。義淵の弟子。東大寺建立に尽力。初代別当）千手窟にこもつて呪術でもつて念じられたところ、雷神が邪魔になる川の大石を取り壊し、木材を運べるようになったと言ひ伝えられておりこの山は龍神信仰の山であったことがわかる。木津川沿いの地域は柚地として重要な役割を果たす。東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、新薬師寺等が柚地に管理事務所を置いて管理、運営にあたり筏、舟などで木津港まで流し陸上げ、木津には諸加工場があった。そこから奈良までは六キロである。大和高原から木津川へ流すのは布目川、白砂川、笠置川などで、堰（川をせき止める構

築物）をつくり池のように水をためそこに木材を貯めこみ、堰をはずして大水が流れるのと共に一気に木津川まで流し、筏を組んでの水運利用の方法で運んだ。当時の人々の知恵のすごさにおどろく。

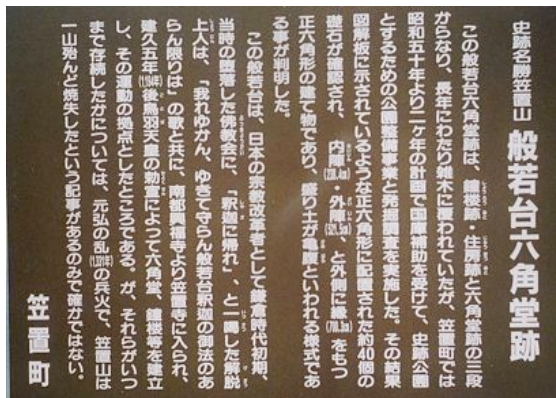
笠置山の東麓で布目川の流れ込む飛鳥路は地理的条件のため各時代に関わった重要な場所であった。必然その地には信仰や伝統を引き継ぎ古代からのものを残している。近世には柳生藩領で川港として役所も置かれた。飛鳥路についてはまとめて後頁にとりあげたい。

奈良時代、平安時代に話を戻す。春日山、芳山、柳生、笠置山と続く山々は修験者、密教修行僧の場であり、寺院建立にも恰好の山岳であった。つまり、古代人の信仰の聖山が思想、信仰にあった場所として引き継がれた。山頂や龍穴に仏を彫り竜王を祀ること、呪術の修法も行った。特に今年、空海が唐より帰国して千二百年（八〇六年）にあたる。密教が貴族社会に受け入れられ、広まると恰好の聖山であった。密教は空海が入

唐して長安清龍寺東塔院、惠果から学んだ。わずか二ヶ月で密教の奥儀を伝授され阿闍梨の位と遍照金剛の名を受けた。惠果は空海に「日本で密教を布教するよう」言い残して没した。空海は急いで帰国（留学年約二年）真言宗を開いた。密教は中国古来の思想をまとめた道教等を取り入れているので山頂、聖山の信仰や雨乞い、雨止めは水運の地と共に早魃祈祷の地となった。密教は神仏習合し新しい仏教の形をつくっていった。つまりこれまでの祈祷のあり方に密教の加持祈祷は呪術的方法が加わった。現世利益を求めるにふさわしいものに映った真言宗、天台宗の時代へと引き継がれた。平安中期になると空也は念仏を唱え阿弥陀信仰が広まりだす。寛和三（八九五）年には恵心僧都源信は「往生要集」を著わし極楽浄土を具体的にあらわす。藤原の道長はその教えのとおり死に際して実行した。（一〇二七、没）道長は一〇〇七年に笠置山に詣でている。平安、永承七（一〇五二）年以後末法思

想の流行にともない弥勒信仰が盛んになる。人々は釈迦入滅後五十六億七千万年後に弥勒菩薩が如来になってこの世に現れ救済するまで待てないと、如来姿の像が多く作られるようになる。つまり仏教も裾野を広げていくと共に専修仏教への方向が強まっていく。時代と神や仏、つまり信仰の形はその流れを引き継ぐのである。

しかし南都の寺院は旧仏教の宗派である。特に法相宗の興福寺の解脱上人（名は藤原信西の孫で藤原貞慶。法然の専修念仏停止を求めて朝廷に提出した「興福寺奏状」の筆者である。それらにより法然は流罪となった。）は、僧本来の修学からの墮落を嘆き笠置山に隠棲し、笠置寺勧進に努め弥勒磨崖仏を崇め修行した。解脱上人が拠点としたところは今公園になっている（六角堂跡と説明板は写真参照）



先にも記したように弥勒は菩薩であるがこの頃からの磨崖石仏には、如来姿のものが作られる。よく知られているのは室生大野寺川向の大野寺大弥勒下生磨崖仏、これは笠置山の弥勒磨崖仏を見本として承元二（一二〇七）年興福寺の雅縁大僧正が発願主で造られた。また、天理市長岳寺の弥勒石仏は古墳石棺の蓋を利用して彫られている。鎌倉時代は龍神の神山であるとともに弥勒信仰のメッカとして多くの子院（塔頭）が建って隆盛をきわめた。四十九坊があったと伝えられる。しかし鎌倉時代の末大事件の舞台となり全山焼亡してしまった。元弘の変である。（一三三二年）後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒し、天皇主体の体制を実現しようとして企図されたが発覚し奈良に逃れ、笠置山に入り反幕府勢力に協力を要請した。河内の楠木正成らが挙兵した。大軍をもって幕府軍は攻め火を放った為笠置山全塔頭が焼亡した。後醍醐天皇は捕らえられ隠岐の島に流配された。この戦いに南隣の柳生一族は後醍醐

に味方し戦った。柳生方十三人は「ズスクチ」で戦死、柳生氏は所領を没収された。建武中興後もどされた。この末裔が江戸時代の柳生流剣術をあみだし指南役として大名になった柳生氏である。その後の笠置山は室町時代一部復興するが江戸時代を通じて古の隆盛をみることはなかった。

先にも記したように、南都の林産物の供給地として諸大寺の柚地が設定され大和高原を含む木津川沿いは大きな役割を果たし続けた。中世大和の国は興福寺が守護で大和の領内に荘官を派遣し、また土地の豪族や春日社神人を荘官（荘下司）に任命し管理運営に当たさせた。再にもこの人達を武力組織し、大和を支配した。この僧衆、神人を「衆徒、国民」と呼んだ。これがのちの大和武士である。戦国時代になると大和高原の山々にこれら衆徒、国民の成長した地侍が山城を築いた。笠置山にもリッパな中世山城跡が残っている。笠置山は山城の国、伊賀国、大和高原の東北の地、柳生古城から尾根伝い

に3km、しかも水運を支配する戦略的に重要な位置にある。細川晴之の守護代木澤長政（一五四二）が築いた城跡である。木澤長政はたびたび大和に攻め込み、これを大和の地侍が迎え撃っている。しかし大きな痛手を受けた。また。このとき多くの寺院の文化財が焼亡した。長政は大阪府と奈良県の境、信貴山にも城を築いた。しかし大平寺の戦いに敗れ殺された。信貴山にはのち松永久秀が一五五九年に城を築き、一五六〇から十数年大和を実質支配した。一五七七年（永禄十年）大仏殿を焼いた人物である。

近世になると笠置地域はほとんどが津藩領（藤堂藩）である。水運陸路の重要な事から管理者を置いた。また笠置山の東麓の飛鳥路は柳生藩領となった。柳生藩の川港として重きをなした。江戸時代六十軒以上の戸数があつて賑わっていたが今十二軒になってしまったと古老の話であった。この飛鳥路に祀られている寺院や神社、勸請縄、いろいろな伝承は神山笠置

山を崇める古代信仰。生活をその時代時代の変化に合わせて求められる神仏、生活として地域を守った人々の重みのある足跡が残されているように思う。いま飛鳥路は奈良―加茂―上野、名張方面へ、また奈良滝坂の道―忍辱山円成寺

―柳生の里―飛鳥路の東海自然歩道のハイキングコースとして多くの人達が訪れ、歴史と自然を楽しんでいる。笠置山の長い歴史は日本が歩んだものを凝縮している。古代信仰、巨石が人々の生活の中で各時代に受け継がれた貴重な山

である。



飛鳥路の勸請縄。布目川の上に掛けられている。このあたりは公園で奇石、巨岩、桜、紅葉等散策に楽しいところである。

了